

# Arthur Quiller-Couch

## 〔“Q”〕

### その人物と作品

安 藤 義 郎

“Q”というペンネームで知られている Quiller-Couch の様々な評論は、すでに定評のある所であるが、その小説においても非常に秀れた技倆を示している。特にその短編小説は注目に値いするものがあり、ここではそれを中心に論を進めて行きたいと思う。ただ彼の作品を理解する上には是非ともその人となりを知る必要があるので、先ずその人物から述べて行く事にする。なおQの人物に関しては、彼の親しい友人であり又すぐれた批評家である、F. Brittain 教授の、“A Biographical Study of Q”, 及び同教授編纂の、“Q Anthology”, 並びにQの作品、“Memories and Opinions” それに各作品の Preface を参照した。

### Part I その人物

“Quiller-Couch” という珍らしい名前は、祖父の Jonathan Couch が、Jane Quiller と結婚し、その子供達四人に Quiller Couch (Quiller と Couch との間に一を入れるようになったのは、Q が 26 歳の頃からである) と名乗らせた事による。この発音は、[kwíləkú:tʃ] であるが、しばしば [kautʃ] と発音されて彼自身も随分困った事があるらしい。人に聞かれる度に、「『長椅子』じゃありません」(長椅子=couch [kautʃ]) と答えなければならなかったし、又、Oxford 大学で小使いの一人が、「これをカウチ先生の所へ持って行ってくれ。だがカウチって発音しないようにな」と使いの者に言っているのを当のクウチ教授が偶然耳にして苦笑したという話もある。

Quiller 家も Couch 家も代々 England の西南端 Cornwall の南海岸にある polperro という漁村に住んで漁業を営んでいた。しかし祖父 Jonathan の時代から医者を開業し、父の Thomas Quiller Couch も Polperro から約 10 哩ほど離れた Bodmin (現在は Cornwall の首都) で医師となった。父はその地で Marry Ford という女性と結婚し、五人の子供をもうけたが、その長男が Arthur Quiller-Couch

である。彼は1863年11月21日生れ、丁度アメリカでは南北戦争たけなわの頃、という事になる。彼が少年時代度々訪れた、Cornwall の南海岸は、（そして後に彼は Fowey を定住の地と定めたのだが）彼の記憶から決して離れない所だった。彼の小説にしばしば出てくる海岸の風景は Cornwall の南海岸と見れば先ず間違いなからう。そしてその風景を描く時彼の筆が活き活きとし、その作品をも成功させている原因ともなっているのである。入江深くにある小さな、静かな港、急流にえぐられた狭谷に並ぶ家々―これらは彼の記憶に焼きつき、更に想像を飛躍させる美しい景色であった。

Qは少年時代を Newton Abbot College に学んだが、その頃の自分の姿をQは、「赤毛の醜い小僧っ子」と書いており、友人の話でも、「小柄で、がっちりしていて、頭の毛は薄茶色で濃く、顔中にそばかすが出来ていた」子供であったらしい。しかし、ギリシャ語とラテン語は、「まるでスポンジが水を吸うように」のみ込みが早く、決してあわてない、怒った事のない生徒であった。この性質は、彼の大きな特徴であり、それにまつわるエピソードもいくつか残っている。又、大学時代からは、ボートを漕いだり、ヨットを走らせたりするのを無上の喜びとしていたのであるが、この少年時代は、そういったスポーツにはあまり興味も持たなかったらしい。

この Newton Abbot College 時代、彼は休日というと、よく Bodmin の近郊に出かけて行ったものであった。1879年夏、Fowey 川を南に下って Fowey の小さな港町を訪ねた時、彼は一目でこの町が気に入ってしまった。そして魅せられたように宿の窓からこの港をいつまでも見下ろしていた。これはQにとって生涯の大事件だった、と言っても過言ではあるまい。というのも、それからは毎年夏休みにこの Fowey を訪れることになり、前述したように後にはここを定住の地と定めて、遂には Fowey 市長に選ばれる程 Fowey のためにつくし Fowey を愛し、その地で幾多の作品が生れ、更に又、将来、一生の伴侶となるべき女性が、その1879年の最初の Fowey 滞在中に現われたからである。1879年というと彼はまだ16歳、その年令を考えると、微笑を禁じ得ないが、とにかく、Fowey は、Q少年にとって誠に魅力のある、甘美な、しかし強烈な印象を与える町であったに違いない。60年後になっても彼は、最初に Fowey を訪問した時の、その夕方の景色を懐しんで、こまごまと描写する事が出来る程なのである。

Qは17歳になると、Bristol にある Clifton College に入学し、その秋、寄宿舎に入ることになったが、その頃の彼は、「何だか、えらい奴が来た」と友人間に思われていたらしい。それというのも、最初の年に彼は Athens という題の創作詩を作っ

て学校の賞を獲得し、早速学内の雑誌、“The Cliftonian”に掲載され、やがて編集長となって活躍し始めたからである。又、その雑誌の出版者、J. W. Arrowsmithと懇意になり、生涯を通じての親友となった。彼は後に Bristol を背景にしたQの小説六冊を出版している。

Qは間もなく Bristol の町を誰よりもくわしく知ようになった。Bristol には母方の従兄がいて、Qは週末という大いその家で過していたし、それに出版者の J. W. Arrowsmith という人は Bristol の町に大へんな愛着を持っていて、町に関してはすみずみまで知っており、その歴史までくわしくしらべているという博識家であったからである。

こうして Bristol の Clifton College で2年間を過したQは1882年10月、19歳の時、Oxford 大学の Trinity College で Classics を専攻することになった。

Oxford に入ったQは、最初から頭角を現わしていた。読書家で、詩人で、ユーモリストで、なかなかのダンディー、そういう評判であった。Qは生涯、明るい色を好んだが、当時は実に派手な格子縞の服を着て学内を歩いていたらしく、学長でさえびっくりしたという話もある。この大学時代から彼の友人関係は急速に増えて行くが、友人を作るに際しては慎重であり、一度友人となると、深い友情と誠実さをもって対した。勉学と同様、ボート部でも巧みな漕手として活躍、このボートを漕ぐという事が、終生彼の大きなレクリエーションとなった。

さて、第三学年の始め、1884年の10月、突然父が亡くなった。しかも財産はおろか、少なからざる借財を残して（これには母の方にも責任があったが）死んでしまった。長男である彼は、Oxford をやめて家族を扶養するために働かねばならぬと一度は決意をしたが、幸い母方の祖父、Elias Ford と、祖父 Jonathan が、勉学を続けるだけの金を出してくれる事になり、大いに喜んだQは、再び大学生活を楽しむ事が出来た。しかしこの頃のQは、大学の勉強そのものよりむしろ、文学、社会科学、そしてボートの方に熱中していた傾向がある。前述の如く、Clifton College 時代、すでに創作詩で賞を得ていたが、1885年、The Oxford Magazine に掲載された詩は、彼の詩人としての才能を如何なく示すものであった。当時 Oxford 大学の若い Fellow（特別研究員）で、The Oxford Magazine の編集者であり、後に彼の無二の親友となった Charles Cannan も十分にこの詩の価値を認めている。この時初めて“Q”というペンネームを用い、以来、ずっとこの筆名を愛用する事になった。又、この The Oxford Magazine には、それ以後1944年に病に倒れるまで寄稿し続けている。

卒業を間近かにひかえたQは、友人 Charles Cannan のように Fellow (特別研究員＝研究基金 fellowship から研究費を支給されて学内に生活し、教授、講師、教師をかねる) となって一生涯 Oxford に於て教鞭をとる事が望みであった。父を亡くした彼は、例え祖父から送金があるにしろ、卒業後はどうしても自分の家族を養わなければならぬと思っていたから、この Fellow になる事が、生活上一番安全な、しかも自分の好みに合う職だと感じていたのである。しかしながら、卒業の年の夏 (1886 年)、その資格を得るために試験にのぞんだのであるが、残念乍ら第二席に留まり、Fellowship は受けることが出来なかった。ただし、学長も他の Fellow 達も、彼を College の講師として任命する事には何等の反対もなかったのであるから、この成績は大した失敗とは言えなかったが、Q自身には大打撃であつたらしい。恐らく文学活動、運動に熱中し過ぎた為であろう。

禍は続いて起るの譬通り、その夏の事、しかも資格試験に失敗して間もなく、彼にもう一つの打撃が襲った。毎年の夏を Fowey で過している彼に、ある日祖父から呼び出しがあり、プリマスにいる祖父の所へ行ってみると、もはや学資を送り続けることは出来なくなったという話である。Qはそれを黙って受け入れた。そしてこれからは、母と二人の弟、二人の妹を自分の力で養わなくてはならぬという責任を痛い程心に感じながら再び Fowey に戻って行った。

この時、打撃を受けたQの精神的支えとなってくれたのは16歳からの許嫁である。その夜、彼は事情を残らず彼女に打ち明け、正式に結婚を申し込んだのだ。Qはずっと後になってこう書いている。

「全く気狂い沙汰だった。しかし事情を打ちあけずに申し込んだら、それは悪い事だったろう。……私達は海へ下る小径の途中で立ち止り、私は野性のジャコウ草の房の上に手をおいて彼女の返事を待った。……今でも、ジャコウ草の房の前に立ち止ると、私はそれを胸に押しつける。すると、そのかぐわしい香りの中に彼女のあの返事が心に蘇ってくるのだ」

この二つの打撃は続いて起っただけに、Qには痛手であつたろうが、実は彼が作家として大成功をおさめる、その重要なきっかけであつた。少しでも金を得なければならぬと考えた彼は、夏休みの後半を Sussex 州の Petworth で家庭教師として働く事になったのであるが、そこに在る間に最初の小説、‘Dead Man’s Rock’ の構想が浮んだのである。そして秋になると Oxford の Trinity College に戻って学生達にヴァージルやアリストファネスを講じる傍らこの小説を書き続け、遂に翌年のイースター休暇中に完成した。早速それを Cassell 社 (この出版社は Stevenson の ‘宝



島”とか、Hagard の“ソロモン王の洞窟”などを出版している)に送った所、幸いにも受け入れられて出版の運びとなった。“Dead Man’s Rock”が Stevenson や Hagard 流の小説であったからでもあろうが、それだけで出版社がまだ名も知られていない作家の原稿を印刷する筈はない。この小説は確かに面白かったのだ。その証拠に、出版されると、これが実に大当たりをとったのである。それに著者名が、“Q”というだけなのも、色々と憶測されて、なお更評判の因となったらしい。1887年秋のパンチ誌は、この小説に関し、例によってパンチ誌らしい文を掲げている。

「Stevenson と Hagard が一緒になって、Qという名の下に、“Dead Man’s Rock”を書いたのであろうか。さもなければ、誠に Q-rious (curious) な文章の一致が見られる。……Qとは誰の事だろう。Qである。じゃAと言ったら何だろう。」というような事を書いている。

とにかく、この小説は作家の出発としては上々であったわけである。

所で、この小説が出版された頃、Qは Oxford の Tsinity College を去る決心をしていた。勿論作家として立って行こうという気持を強くしたのは確かだが、もう一つには父の残した借財を返すためにも Fellowship をうけずに College 講師として留まっているよりは、作家として、ロンドンで働いた方が望みありと判断したからであろう。借財は彼一人が負う義務は決してなかった。しかし彼の誠実さが、そうさせざるを得なくしたのである。ロンドンへ出たQは、“Dead Man’s Rock”を出版してくれた Cassell 社で働くと同時に、文字通り夜を日についてペンを走らせ続けた。

それから六年後、彼はある日、こんな手紙を友人に送った。

「今やっと借金の最後の一かたまりを払った所です。ですから貧しいけれど、気持はさっぱりとして、うしろめたい所は全くありません。考えてもみて下さい。私の頭にシルクハットが乗ったのは、この 20 ケ月の間にたった一度（それもお葬式の時）だけでした。」

Qのロンドン時代とも言うべきこの年代(1887～1892)は、彼にとっていよいよ作家としての地位を確立する上に重要な年代ではあったが、苦労の連続でもあった。又、多数の友人を作る事が出来たものの、ロンドンの生活は結局彼には向かなかったのである。

1887年(Q 24 歳)、ロンドンに移った彼は、主として Cassell 社で働く事になった。出版社という関係上、Qは色々な作家芸術家、と友人になる事が出来た。その中には画家の John Sargent、女優 Ellen Terry、作家の Henry James 等がいる。そして John Sargent の画室でマクベス夫人に扮している Ellen Terry の肖像画が

出来上るのを見つめていたり、又、John Sargent と一緒にパリへ旅して、カルメンシータの踊りを見たのも（Sargent はその時有名な彼女の肖像画を画いた）ロンドン時代における思い出の一つであった。

Cassell 社でのQの仕事は大部分筆をとって書く事であったが、前述の通り、借財を返済するために、ペンをとる仕事ならば、あらゆる事をして努力に努力を重ねた。“The world of adventure” という子供向きの物語シリーズ編集にたずさわった事もある。一方、しばしばロンドンの雑沓をはなれて、未来の妻のいる第二の故郷ともいべき Fowey に出かけて行き、その土地柄、人々の気質などを精しくしらべていた。この印象は第二の小説、“The Astonishing History of Troy Town” の背景となっている。そしてこの小説を書き終えると、すぐ第三の小説、“The Splendid Spur” に着手した。作家としての自信が出来たのと、働かねばならぬという気持が、大いに刺激になったのであろう。この “The Splendid Spur” は、Q にとっては思い出深いものであった。——1889 年（Q 25 歳）8 月 22 日に完成。その日は結婚式の当日だったのである。新妻は勿論 16 歳当時からの恋人 Louisa Amelia Hicks。二人は Fowey で式をあげると、新婚旅行もそこそこにロンドンへ移って行った。（夫婦の仲は睦まじく、半世紀以上にわたる結婚生活は細やかな愛情で結ばれていた。その五十余年間というもの、彼が家を離れている時には、手紙を出さない日はなかったという）。

ロンドンでの新婚生活は、ただあわただしい毎日であつたらしい。貸部屋を転々として後、一応 Clarvill Grove に一軒家を借りたものの、一年足らずの中にそこをひきはらい、一時妻を Fowey に帰して、Q は单身 St. James's Street に間借りすることになった。既に “The Splendid Spur” を書き終え、第四の小説、“The Blue Pavilions” にとりかかっていた Q は、その小説の脱稿と、Cassell 社新発刊の週刊紙、“The Speaker” の執筆とで猛烈にいそがしくなったからである。この週刊紙は、政治、文学、美術に関するもので、Q は主筆の Thomas Wemyss Reid からその才を認められ、副主筆としてその第一号から健筆を振り出した。執筆者の中には Peter Pan でおなじみの、J.M. Barrie（彼とは生涯親友としてつき合っていた）、George Moore、W. B. Yeats 等という錚々たる作家を擁し、又、更には Oscar Wilde も度々顔を出して、よくQと食事を共にした事もあった。そしてこの The Speaker は彼を一流の小説家として、特に短編小説家として、世に認めさせる非常に大きな役割を果たしたのであった。ロンドンと Fowey の間を行き来しながら、泉の湧き出るように書きつづけた短編小説は、次々に The Speaker に掲載され、1891 年には、

“Noughts and Crosses” という題名の下に、又、The Speaker 以外の雑誌に載った短編は翌年、“I saw Three Ships, and Other Winter tales” という題名の下に、それぞれ一冊の単行本として出版された。これは実に短編小説家としての彼の位置を不動のものにさせるに十分な出来ばえであった。特に Cornwall を背景にした短編は、彼の卓越した技量を如何なく発揮したものであり、中でも 1890 年 10 月に Fowey で長男 Bevil が生れた事に暗示を得て書かれた、Old Aeson という秀れた作品が載せられている。

翌 1891 年早々、家族と共に Kensington に移った Q は、ますます作家としての名声を高めて行ったのであるが、その年の秋、突然彼は病に倒れてしまった。それまでの過労がたたったのである。更に翌年になると不眠症にかかり、すっかりノイローゼになってしまった。友人の医者診断によると、「人ごみを恐れて街路を横切るのもおじけづいてしまう」程のひどい神経衰弱であった。友人のすすめで専門医の診察を受けた Q は、出来得るならばロンドンを離れて海辺の生活をするように、という忠告を与えられた。内心、大いに喜んだのは彼自身である。後に彼は次のように言っている。

「どうも Fleet Street (ロンドンの新聞業中心地) は、私の生活には合わなかった。私はそこで非常に多くの、すばらしい友人を得た。それだけで価値はあったのだが、それ以外には何も得なかったと思っている。」

この言葉通り、Cornwall に生れた彼には、都会の目まぐるしい生活には堪えられなかったのであろう。Cassell 社には、今まで通り、The Speaker に書き続ける事を約束して、Q は直ちにロンドンを離れ、なつかしい Fowey に向った。その年、Fowey の港近くに一軒の家を借りたのであったが、ここが非常に気に入ってしまい、数年後に買い求めて、“The Haven” (港、安息所の意) と名づけ、彼の終生の家となった。

Fowey に移ると、彼の健康状態はすぐに回復に向った。もともと、彼は強い体力の持ち主ではあったが、やはり彼にとって Fowey は身心の故郷であったのであろう。

「私の天職は事務所の椅子に坐っていたり、他人の命令を受けたり、心が否とする行動を無理にしたりする事は出来ない。都会の生活からのがれて、新鮮な空気を吸い、体操をし、やわらかい芝を踏み、朝早く起きて潮騒の音を聞き、磯の香りを嗅ぎ、そしてこの世で一番なつかしい、あの海のひろびろとした眺望を楽しむ事なのである」

これは Fowey に移った直後、The Idler という雑誌に寄せた文であるが、これを読んでも自分の生れた海辺での生活にほっとしている彼の姿が容易に想像できる。

Fowey は Fowey 川がいくつかの小さな川にわかれて海にそそいでいる所にある古い港町である。その各々の小川の両側は相当に切り立っていて、美しい青々とした高い岡となり、両側の海岸にそっていくつもの狭い街路が通っている。Qの家“*The Haven*”は、写真でみると、港のすぐ近くにあつて、その静かな景色をほしいままにしており、背後はかなり急な傾斜となっている。その傾斜面には、いくつかの破風作りの白い家々が並び、いかにも落ち着いた感じを持たせる。Qがこの“*The Haven*”を非常に気に入っていたというのは、そういう環境も勿論だが、その家の内部が一風変っていたからである。というのは、Qの前にこの家を借りていた人が海軍士官で、各部屋のドアに自分が乗った軍艦の名をしるし、その下にその軍艦の水彩画をかけてあった。海に関しては深い愛情を持っているQの事故、これを見ると、大いに喜び、そのまま“*St. Vincent*”号の部屋でペンを走らせ、“*Victoria*”号の部屋で食事をとる、といった具合に楽しんで部屋を使っていたらしい。

この“*The Haven*”に住んでから健康状態は日増しによくなっていったが、完全に恢復するまでには、それから丸一年の期間を必要とした。1894年、すっかり健康をとり戻した彼は再び旺盛な文学活動を開始した。七年間に十二冊以上の本を書いたり、出版したりしている。しかも *The Speaker* には約束通りきちんと寄稿しての上である。出版された本の中には二、三の長編小説の他、*The Speaker* に載せられた短編集（大部分 Cornwall の生活に関するもの）を初め、*Green Bays*, *Poems and Ballads* の如き詩集、英詩の *anthology*、最初の評論集 *Adventures in Criticism* 等が含まれている。

又、この頃、彼を非常に驚かした一つの依頼があつた。それは Stevenson の著作管理者である Sidney Colvin という人から、Stevenson の絶筆となっている小説、“*St. Ives*”を完成してくれるように、と頼まれた事である。Qの初期の作品が Stevenson や Hagard の作品によく似ている事は明らかであるが、他人の作品を完成させるのはとにかく至難の事である。それに Stevenson とQが親しい間柄で、その作品の趣旨なり、すじの発展なり、最後はどうなるかという事などをよく知っているというなら別問題であるが、二人の間には、友人関係どころか、一度も会った事さえないのである。（彼が Stevenson と友人であるかのように伝えられている向きもあるようであるが、それは初期の作品が似ているのと、後述するように *St. Ives* をQが完成した、という事による推測である）。Q自身も最初は非常に驚いたが、Colvin の熱心な依頼によりこれを受諾し、遂に 1898 年に完成した。Qの受持った部分は全体の四分の一に満たないものであつたが、実によく Stevenson の特徴をとらえ、文

体が殆んど同じであった為、どこまでが Stevenson の作で、どこからが、Q の作品なのか、はじめて読んだ人は誰もわからなかったといわれている。

この St. Ives を完成する以前、1896 年には、“Ia” という小説を出版しているが、これは明らかに今まで通りの、いわゆる Stevenson 的な小説に甘んじていたくないという事実をはっきり示すものであり、確に内容の秀れた小説ではあったが、皮肉な事に売行きはよくなかった。続いてその三年後(1899年)に公けにした“The Ship of Stars”は深みのある、Q の作品中でも傑作の一つに数えられるものとなった。これは全く彼と同じ場所 Bodmin に生れ、同じ運命、同じ道を辿って行く一青年を主人公にしており、殆んど Q の自伝とも言えるものであって、この中には Q の人生観をも見出す事が出来る。Sidney Colvin もいっている通り、「新鮮で、よく書き込まれ、卓越した性格描写、そして作者の個性が豊富に含まれているために最高傑作になっている」のである。更に同年“Historical tales from Shakespeare”を出版。これは Lamb が“Tales from Shakespeare”を書いたのと、全く同じ趣旨による。Lamb のはぶいた Shakespeare の史劇を Q がおぎなった形になるが、これは中々の好評を博した。日本では、この中の一つ、“Julius Caesar”が研究社から出版されている。

一方 Q はこの間にロンドン時代の友人との旧交を温めたり、又新しい友人との交際を広めている。そして誰に対しても親切に、誠実な友情をもってしたので、ほんの一寸の交際でも長く Q を記憶している人が多かった。又 Cornwall 出身の貧しい詩人の本に長い序文を書いているが、これも苦勞している作家とか、高邁な目的に向って努力している詩人を援助しようとする彼の心から出たものであった。

著作にいそがしい毎日を送っていた Q にとって唯一のレクリエーションは、ボートを漕ぎ、ヨットを走らす事であった。すでにこれが大学時代からの趣味になっていた Q は、早速、Fowey のヨットクラブの会員になって、会員達と或いは歓談し、或いは夕食を共にして、ただヨットを走らせる事ばかりでなく、そういう社交面でも彼は大いに楽しんだものであった。又、Picotee と命名した自分のボートに乗って港を一周したり、入江の奥深く入って行ったり、時にはそのボートの上で空想し、時には釣をし、心がむけば、小川を漕ぎ上って友人の家を訪問したりした。そして請われるままに Fowey の Grammar School でボートレースの技術を少年達にコーチした事もある。

Q は後述するように社会的な面でも大いに活躍した人であるが、すでにこの頃から公共の事には深い関心を持ち、進んで援助を惜しまなかった。慈善事業というと、い

つでもペンをとってその推進のために新聞に寄稿したり、バザーのために短編や詩を書いたりした。1897年には Victoria 女王即位 60 年式典が催されたが、Fowey においては、Q が率先して色々な行事を計画した。当日（1897 年 6 月 22 日）などは午前 4 時に起きて、それらを指導すると言った張り切りようだった。以後も国をあげての式典の時には、必ず Q が中心となるか、又は援助するかして、Fowey に於けるそういう祭典は次第に盛んになって行った。これは Q 自身が社交的な、明るい性格であり、お祭り気分を好んで、しかも世話好きだったからである。後年 Cambridge 大学の教授になった時も、自分の部屋に大勢の客を呼んで昼食会を催したり、酒を飲みながらおしゃべりをするという事を非常に楽しみにしていた。とにかく、自分自ら率先してそういう世話役を買って出たので、Fowey の人々の間に、Quiller-Couch という名が次第に親しみ深いものになって行ったのである。

ただ、その後間もなく、彼が Fowey の人々から反対を受けた事がある。それは 1899 年から始まったボーア戦争に関してであったが、国をあげて戦争気分なのに、Q は断然反戦的態度をとったからである。そして自分の意見を堂々と述べ、同じ反戦的態度をとっていた議員、Leonard Courtney の主催する集会に招かれると、すぐに受諾し、Liskeard で開かれた、その集会に出席して、開会の演説をしたのであった。

この Fowey の人々の反感は一時的なもので、すぐに消えてしまったが、丁度同じ頃、Q 自身にとって誠に残念な事件が起った。自分が副主筆となって健筆を振り、その後、幾多の傑作短編を載せ、今日まで寄稿しつづけて来た The Speaker 誌廃刊の件である。1899 年 6 月（Q 36 歳）、Q は主筆の Wemyss Reid から手紙を受けとり、彼（Reid）にかわって 10 月からは主筆が若い優秀な Oxford 大学出身者に受けつがれる事、従って内容的にも変る事を知らされたのである。Q はその手紙に対し、深い遺憾の念を表わした丁重な手紙を送り、最初の頃、共に苦勞した事から執筆者仲間の、若々しく楽しかった思い出、そして自分を世に送ってくれた事に対する感謝の言葉を述べている。こうして過去十数年間、寄稿しつづけて来た The Speaker との関係は終る事になったが、ほんとうに Q としても残念な事であつたろうと思われる。The Speaker はその後名前が The Nation に変り、更に 1931 年 The New Stateman に合併されて、極左的傾向の雑誌になった。Q は廃刊後もずっとこの雑誌を講読しつづけたが、次第に極左的になって行くにつれて、Q はしばしば腹にすえかねる所があった。ただ The Speaker 発行当初から左翼系であつたから、その思想を云々するのではなく、Q が怒つたのは、その雑誌の内容、態度であつたらしい。しかし、「もうこんな雑誌はとらない」と何度もいいながら、Q は一生講読しつづけていた。Q の

友人の一人は、「あんな事を言っても決して彼は途中でやめるような事はしない」と断言していたそうであるが、こういう点でもQの「誠実」な性格の一面を見る事が出来るかも知れない。

さて話は再び作品の事に戻るが、この頃出版したものに短編集, “Old Fires and Profitable Ghosts” と、彼の名を高めた, “The Oxford Book of English Verse” がある。これはQの大学時代の友人 Charles Cannan (前出) の要請によるものである。Charles Cannan は当時 Clarendon 出版社の秘書となっていて、Qに英詩の選集を依頼したのであった。Qはこれを受諾、13世紀から19世紀までの英詩をしらべあげるといふ努力を重ね、その結果が, “The Oxford Book of English Verse” となった。これは1900年(Q37歳)に出版され、最初は人気がなかったが、一、二年後に急に有名になり、英詩選としては最高のものという折紙がつけられた。部数も1939年までに第20回印刷、50万部が売れた、というから、今ではもっと版を重ねているであろう。anthologyでこれだけ売れるのは他に例がないのではないと思われる。

“The Oxford Book of English Verse” 出版から、Cambridge 大学の文学教授に就任するまでの12年間は、彼が著作に、政治面に、教育方面に、とその多彩な活動を行った期間であった。年令的にもようやく油が乗って来た40代という時期である。先ず作品から見ると、詩集、論文集, “The Oxford Book of Ballads”, “The Oxford Book of Victorian Verse” 等の anthology, 子供向きの本数冊、20冊に及ぶ小説を書いている。その小説もそれぞれ舞台、事件、人物を異にし、彼の小説家としての技量と、幅の広さを遺憾なく発揮している。“Hetty Wesley” という小説では、同名の女性を主人公とし、(今までには見られなかった事だ) メソジストの家庭内の悲劇を描いている。又同じく女性を主人公にした小説には, “Lady Good-for-Nothing” があるが、これは舞台を18世紀のマサチューセッツとリスボンに移している。更に “Fort Amity” では一転して北アメリカを舞台に、一人の若い青年将校の戦争に対する混感と絶望を描いている。その他、作品に関する事は Part II にゆずる事にして、ここでは彼の Fowey における、社会、政治、教育面における活動を見ることとする。

1897年のヴィクトリア女王即位60年祭に、Qが率先して Fowey の人々を指導したのは前述した通りであるが、1902年、エドワード7世即位式の時もQは色々な計画をして、盛んな祭典を催した。その時のポスターも彼のアイディアによると思われるが、午前8時に教会の鐘が鳴る所から、午後10時30分に仮装舞踏会に到るまで、茶

会あり、運動会あり、提燈行列あり、誠に種々様々な、皆で楽しめるようなプログラムを組んでいる。こういった彼の献身的努力は、(彼自身はただ楽しんでやったに違いないが)次第に Fowey の人々の心に深くしみわたり、公の仕事はQにまかせるようになって行った。そして二、三年後には、Cornwall 教育委員会副会長、州参事会員、公安委員、Fowey 港委員長、Fowey 地区水路案内委員会会長、Fowey 商業振興会会頭、等々の要職に任じられるという、いわば、Cornwall 州の名士になってしまった。しかもこの様な公的仕事を実に真面目に、温情をもって為したといわれている。

Qの教育活動は1904年、州教育委員に選ばれた時から始まる。Q自身が教育的な仕事を好んでいたのは確で、(最初は教育者になろうとした程の彼である)事実、非常な情熱をもってこの仕事に当った。13年間この委員をつとめ、そのほとんどの期間、副会長か、会長となって活躍している。そして学校管理委員になった時など、Cornwall のあちこちに点在する300以上の小中学校を年間に視察しなければならない事もあった。当時は自動車もなければ、便利な交通機関もなく、徒歩で辺鄙な道を遠くまで行く事もしばしばであった。しかしQはこういう旅も億劫がる所か、むしろ喜んでいたようである。そしてその地の牧師、校長、先生達と親しく話を交わしたりしたものであった。Qとその委員会の目的としては、Cornwall 全域にわたって中学校の数をふやし、どこの家からでも適当な距離にある所に設置して、子供達全部を中学に進学させる事であった。しかしこれには相当の偏見やら、疑惑がむけられたらしい。又、税金の浪費であるとか、それまでする必要なしとかいう反対も出たり、更には州議会でさえ、はっきり反対を示したと言われている。しかしながら、Qを中心とする委員会は強引に計画を実行して、遂に Cornwall 州の各地域に、すべての子供が通学出来る距離に、中学校を創設したのであった。後年、Qは多くの小学生が、中学校に進むのを見るのが、大きな喜びの一つであったという事である。

こういう教育面の活動と共に、政治面でも大いに力をそそいでいた。Qはもともと自由党支持であったが、Cornwall 南西区では1895年以来、自由党の勢力は全く衰えていた。Qはこれを盛り上げようとしたのである。1906年1月の総選挙に際して、Qはさかんに自由党を応援し、その結果は Cornwell 全域を通じ絶対多数で自由党の勝利に終わった。蓋し、Qのペンの力と、その人物の影響力が大きかったためであろう。友人の Barrie (前出) は、Q自身立候補するようすすめたらしいが、彼はそういう気持は少しも持っていなかった。1910年の1月にも総選挙が行われたが、英国全土では自由党は後退したものの、依然として Cornwell 南西区では自由党議員を議会



に送ることが出来た。

その年の12月にも選挙が行われたが、Qが自由党のために力をつくしたのはこれが最後になった。それというのも次のような事があったからである。1912年、自由党政府の提案による Mental Deficiency Bill（精神障害者法案）という法案があり、これは簡単に言えば、気狂いも精神薄弱も一緒にして、政府の施設に入れてしまおうというものであった。Qは人道上の立場からこれに真向うから反対、この法案を支持していた精神薄弱保護委員会あてに三つの公開状を示し、丁重な言葉乍ら、その態度を変えるよう強く要請している。幸い、この法案は第三読会にかかる前に取り下げられ翌年改正案が出る事になったが、確にこれが一つの原因であった。その年の12月、労働党の機関誌、“The Daily Citizen”の記者とインタビューした時、「私は公のためには正直で自由な意見を示してくれる誌を望んでいる。それが労働党のものであろうと何であろうとかまわない。現在の私としては労働党と心を同じくしている。なおこれ以後、政治的な公の生活からは隠退するつもりである」と述べている。しかもその時、彼は Cornwall 南西地区の自由党派支部長であったのである。その為、この発言は相当の反響を与えたいが、要するに彼は自由党支持ではあったが、いわゆる政治的な動きをしようとしたのではなく、あくまでも自分の良心、真の liberal mind に従って政治に関心を示したにほかならない。隠退するにあたり、彼は「よりよい自由主義者」としてこれからも過す事を宣している。Qは、その後、確に労働党を支持することもあったが、やはり彼の「誠実な」性格は自由党からすっかり離れてしまうことは出来なかった。

話は前後するが、これより二年前、即ち1910年（Q47歳）、それまでの文学、教育、政治面におけるQの活動に対し、同年7月、George 5世陛下より、St. James's Palace に於て Knight 称号を授けられた。これで Sir Arthur Quiller-Couch となったわけである。Fowey では、一人Qだけの名誉ではなく、Fowey 全体の名誉であると言って喜び、Qがロンドンから帰ってくる時は Fowey 楽団（これもQが二、三年前創立に力を借したものである）が、彼の家“The Haven”の前に整列、“A fine Old English Gentleman”を奏してこの名誉ある「郷土の名士」を迎え入れたのであった。

さて、その頃、長男の Bevil は Oxfoad 大学の学生となっていて、当然の事ながらQはよく Oxford に出かけたものであった。そして友人達と旧交を温めたが、たまたま五年毎に選挙によって任命される教授職（詩論を講義する）が空席となった事があった。友人の Raper 教授は、Qに立候補するようすすめ、彼も同意したが、や

はりもう一人の友人で、President of Magdalen [m3:dlin] (学寮長) である T.H. Warren が立ったため、彼は立候補を取りやめたのである。所が同じ頃、Harold Harmsworth 卿が、2万ポンドを寄贈して Cambridge 大学に新しい教授職を置く事を提案した。これは Edward 7 世陛下を記念して、King Edward VII, Professor of English Literature と呼ばれる教授職で、「任命権は国王、教授者は Chaucer 時代以降の英文学を論じ、あわせて大学における英文学研究を發展させる」というものであった。この設置には学内の反対もあったが、とにかく大学側はこの提案を受諾、初代には古典学者の Arthur Woolger Verrall 教授が任命された。しかし Verrall 教授はすでに身体が衰弱して車椅子で出講するという状態であり、一年半その職にあったものの、1912年6月に亡くなってしまった。そして10月、新学期が開始されてもその教授職はしばらくの間空席のままであった。約一ヶ月の後、内閣は Sir Arthur Quiller-Couch を Edward VII, Professor of English Literature に任命する事を正式に決定、大学側にこの事を通達したのであった。

この教授職任命はQ自身も驚いたし、他の人々にも驚きを与えたい。というのはQと言えば、一般には “The Oxford Book of English Verse” のすぐれた anthologist として、又、小説家としてのみ知られていたからである。確にQは古典学者ではないし、それまで学問的な業績をあげていたわけではなかった。故に伝統派の学者達からは、これは全く政治的な任命だとさえ言われた。

しかし学者仲間でもこの任命を適当とする者もあった。A. C. Benson 教授もその一人で、Qが小説家のみならず、学問的造詣の深い事を見抜いて、彼に手紙を送り、「この教授職に貴卿が就かれた事を大いに喜んでいる」と言っている。又、他の教授からも激励の手紙を受けて、始めは彼自身も心もとない気持でいたのだが、(生来、彼は恥かしがり屋であったし、第一、ここ 25 年間というもの、教壇に立った事がなかった。講義の経験と言えば、大学を出た頃、College で小数の生徒にヴァージルやアリストファネスを講じた位なものだった) やっと気持を立て直し、1913年1月、Q 夫妻は休暇には Fowey に帰ることにして、Cambridge 大学内に居を移した。

1月29日、彼は学内に新たに建てられた、Arts School の大講堂で最初の講義を行った。講堂は、教授、学生、一般の人々であふれる程であった。彼はモーニングをきちんと着て、静かな、柔い、しかし威厳のある声で話し始めた。その講義はプラトーの話から始められた。Q を単なる Stevenson 流の小説家と思っていた人々は、その

よく準備され、整然とした講義の中に彼の古典教養の深さを見出して恐らく驚いた事であろう。そして彼の人間味と、高尚な趣味と、ユーモアとをまじえた講義は忽ち評判になり、Cambridge 大学の講義の中で一番多くの聴衆を集めてしまった。

この講義録は、“On the Art of Writing”として一冊の本にまとめられ、今なお多くの人々に愛読されている。

この他、Qは週に一度か二度、彼の教授室で公式でない講義を行った。これは長年にわたって行われたが、いつも夜の8時30分からだった。講義といっても、むしろ討論会で、最初は実に informal な、気楽なものであったらしい。Q自身、煙草やコーヒーを学生に出して楽しみながら話し合うといった形であった。この集りは後に公式の講義にとり入れられて、「アリストテレスの詩論」となったが、この講義は時間が時間だけに、街路から聞えてくる、酔っ払い学生の大声にしばしば中断されたものだった。しかしQは怒りもせず、「諸君、一寸、一と休みして、我々より不真面目な人達の言う事を聞こうか」と言いながら、さわぎがおさまる迄、待っていた、という事である。

Qは Cambridge 大学の教授と言っても、いわば、別格であり、学生の個人指導はしなくてもよかったわけであるが、訪ねてくる学生、及び卒業生に対しては、その研究やら、作品について、懇切な助言を与えていた。ただ、Qを訪問する時間は、午後か夕食後に決められていて、うっかり約束もなく午前中に訪ねたりすると、三度目までノックしても答えがなく、四度目にノックすると、執筆に夢中になっているQは、自分でも無意識に大声でどなりつけ、訪問者をびっくりさせたものであった。

とにかく、Canbridgeにおける彼の講義は名声噴噴たるものがあり King Edward VII, Professor of English Literature にふさわしい名講義をしつづけた。そして休暇がくると夫妻は Fowey に戻り、楽しい気ままな生活を過すのが習慣となっていた。

やがて 1914 年夏、夫妻が Fowey に帰って二、三週間たった頃、第一次大戦が始まった。すでに Oxford の士官候補生連隊に入れられ、特別予備隊に編入されていた長男の Bevil は、直ちに近衛砲兵少尉として召集をうけた。そして 8 月、彼は英国派遣軍の中であって、フランス戦線へと向って行った。

Qは 1908 年以来、Cornwall の国防義勇軍の団長格になっていたため、1914年の夏休みはほとんどその仕事に追われて過した。この間の事情は、“Nicky-Nan” という小説に表わされている。在郷軍人の召集、派遣、流言、間諜行為、不安、そういう戦争につきものの事件が描かれているが、特にQはこの小説の中で、地方の貧しい人々に対し、深い同情を寄せている。

その年の秋、家族を Fowey に残して単身、Cambridge に帰って来た Q は、実にさびしい気持を味わった。長男 Bevil の出征もさることながら、Cambridge 大学内の変わり様には、ただ眼を見はるばかりだった。大部分の学生が軍隊へ、そしてその多数の者が戦死していたからである。長男の身にも何かありはしないかという大きな心配を抱きながら Q の講義は少数の聴講生を前に続けられて行ったが、その少数の学生でさえ、一人、二人と戦場へ向って行った。

「大学の方庭には以前のように掃除人が枯葉をはき集めている。しかし、そこを横切って講義に出席する学生は誰もいない。学内では学生達の姿を殆んど見かけないし、その話し声も聞かれない。ホールでは、二、三の学生達が集る事もあるが、ほとんどが O.T.C. (士官候補生) の軍服を身につけている」

更に翌年 1 月には、

「Cambridge は、全く守備隊の町になってしまった。晩鐘も禁じられて、夕暮を告げる事もない。しかし夜になって、軍隊の姿が闇に消えてしまうと、私はツェッペリンの爆撃的にならないよう、煙草の火を用心深くかくしながら、構内を散歩するのである」

Q は当時の Cambridge の様子をこう書いている。

Q 自身も教授戦士の一員としてライフル銃をかつぎ軍事教練を受けなければならなかったし、1915 年 3 月から 10 月まで今度は Cornwall で兵役につかなくてはならなかった。この時、Q は中尉として一小隊を指揮することになったが、彼の指揮振りは、どうみても「軍隊的」ではなかった。ある時行軍から帰って来る途中、自分の家の前にくると、大休止を命じ、庭園内にテーブルを持ち出してお茶をふるまい、全員に海水浴をさせて後、足の爪を切るよう命じたとか、毎朝 9 時 30 分になると、160 人の兵隊のあごを検査し、ひげが剃ってあるかどうかをしらべたとかいう話が残っている。

こんな事をする士官は英陸軍創設以来、初めてだったので、部下達の間では、「一寸変っているが親しめる上官」というもっぱらの評判であった。

その年の 10 月、兵役解除になって再び Cambridge に帰って来た彼は、“Shakespeare's Workmanship” として後に出版された講義を、続いて翌年秋からは、これも後に、“The Art of Reading” として出版された講義をそれぞれ行っている。二つとも名講義で、特に “Shakespeare's Workmanship” の中の “Tempest” は最上のものという評判を得た。

翌 1918 年の夏休みには、Cornwall の青少年団を組織して、人手の足りなくなった農家に配置し、収穫の手伝いをさせるというような事にまで心を使った Q であった

が、大戦も次第に終局に近づき、一度は軽傷を負った Bevil も、その年の9月には、フランスから休暇をとって帰って来られるようになった。Qとしては、全くほっとした気持ちであっただろう。そしてその年の11月11日、勝利裡に待望の終戦がやって来たのであった。

後に彼はこの日の事を思い出してこう述べている。

「一人の男が狂喜して店に飛びこみ、妻君に戦争は終わったぞ、と叫んでいました。恐ろしい緊張の解ける日がやって来たのです。四年以上堪え忍んで来た人々に、祖国が救われたという安心感と、郵便配達が電報を持ってくるのではないかという恐怖（戦死したという公報）からの解放を与えたのです。覚えていられるだろうか、あの日の事を、マーケットには人々が群り、そして軍用トラックが静かな雨の中をパレードして行ったあの日の事を……」

さて、1917年に軽い傷を受けたものの、元気に戦争を切り抜けて来た長男の Bevil は終戦後も占領軍としてドイツに進駐する事になった。彼はすぐ帰還しようと思えば、それも可能ではあったが、やはり自分の部下達と行動を共にしたいという希望を持っていたのである。

その年の冬、休暇をとって再度帰国した Bevil は、Qの親友 Charles Cannan（前出）の令嬢と婚約し、翌年6月に式をあげる事になった。そして除隊後は直ちに望み通りの船会社に就職出来るという、甚だ希望に満ちた将来が待っていた。幸福なその年の冬を家族と共に過した Bevil は、休暇を終えると Oxford にいる許嫁のもとに立寄ってから再びドイツへ戻って行った。

しかし1919年2月、Qが Cambridge にいる時、突然、「Bevil 重態」という驚くべき電報がとどけられた。Qは直ちに Fowey に帰ったが、その時 Bevil の死を告げる第二の電報が配達されたのである。Bevil は急性肺炎のため、ドイツで急死したのであった。

Bevil の死はQの心に永遠に消えない深い傷跡を残した。彼は妻の悲しみも考えて、Cambridge を退き、Fowey にひきこもる事を一時は真剣に考えたものであった。

「もう私が Cambridge にいるのも長くはないと思います。今の家庭事情では、私有家から離れる事は出来ないでしょう。Cambridge を去るのは誠に残念と思いますが、現状はこの通りなのです」

Qは当時の手紙にこんな事を書いた程であった。

こうまで考えたQではあったが、やがて、悲しみに打ち勝つ為には、ただ働く事が

一番よい慰めになると悟った彼は、もう一度心の立直しにかかった。事実、その頃程 Q が文学に、研究に、Cambridge 及び Oxford 大学の講義に、Cornwall の社会活動に、又学内のクラブ会員に、或いは Cambridge 大学の漕艇部長にと、いそがしく活動した時期はなかったであろうと思われる。

「今は少し働き過ぎです。——Cambridge で、又後に Oxford で、試験の仕事に追われています。でも苦痛に立向って打勝つ為には、それがいいという事がわかりました。尻ごみしては心が萎縮するばかりです。私の最愛の者の命を奪ったこの世に起る事なら、もう何も気にかかるものはありません」

その年の終りに Q は友人にこう書き送っている。

1920年、Cambridge 大学出版部から要請のあった Shakespeare の作品出版を Dover Wilson 教授と共に着手したのを初め、Shakespeare 協会の支部を Cambridge に創設してその部長に就任、続いて Dent 出版社から子供向きの名作シリーズ責任編集を受諾、という風に矢次ぎ早やに依頼された仕事を片端しから手がけていった。又、Fowey に帰れば、州議会、及び Cornwall 教育委員会の仕事に打ち込み、或いは Fowey におけるレガッタ計画にいそがしい日々を送っていた。これらはすべて心の痛手を少しでもまぎらわそうとしている Q の姿であったが、如何にしても悲しみが蘇ってくるのはどうしようもなかった。特に Q は毎年のクリスマスを楽しみにして前々から準備をすすめ、イヴには家中で念入りに飾りつけをした。そしてクリスマス当日には家族そろって朝早く教会へ行き、午後は大い自分の部屋でアンデルセンのおとぎ話を読んで楽しく過すのが習慣であった。だが、その年のクリスマスは何かにつけて Bevil のいない事を思い起させる堪えがたいものであった。前年のクリスマスが、希望に満ちあふれていただけに、かえて悲しみは深いものがあっただろうと思われる。

こういう話がある。

Bevil が戦時中、ずっと乗りつづけていた愛馬が、まだ生き残っている事を聞いた Q は、その馬を軍隊から買い戻し、Fowey に連れて来て、可愛いがっていた。その馬は数年後に死んでしまったが、Q は Cambridge 大学の自分の部屋に Bevil の軍服姿の写真と、その下に、愛馬の写真とを掛けておいた。事情を知っている人は、この二つの写真について質問してはならぬ事がわかっていたが、たまたまそういう事を知らない人が尋ねると、Q は静かな口調で話し始め、そして最後にはこらえ切れなくなって、寝室へ入って行ってしまったという事である。

1923年から約10年間、即ちQの60年代の活動は、勿論以前よりは衰えたが、それでも、二冊の講義録、及び評論の出版、Substantial Anthology of English Prose, Bible Anthology 等の編纂、Duchy Edition として今までの小説の出版、更に The Children's Bible の出版、等をしている。

ただ、この頃Qにとってつらかったのは、眼が悪くなって、その進みが早く、一時は、眼鏡をかけても役立たない程になってしまった事である。友人達は、盲になってしまうのではないかと心配したが、彼自身は、いつものおだやかな調子で、「すぐに直るだろうと思う。自分としては楽しい日々を過している」と手紙に書いている。

その眼病に罹っている間も Cambridge の講義を続け、又、“Castle d'Or” という小説の構想を練っていた。1926年の始め（Q 63歳）、視力は更に衰えて行ったが、幸いにも同年夏頃から再び恢復のきざしを見せ、翌年の末までには、殆んど全癒した。

前述したように、30冊にのぼる今までの小説をまとめて“Duchy Edition”として出版するのは確かに冒険であった。一人の作家の作品を30冊も出す事もそうであるが、それよりも文学の風潮が大戦を境として急変していたからである。強烈な場面、性、心理分析、人物暴露、そういうものを取り扱った小説が好まれる風潮であった。Qは自分の小説にそういう要素の持ち合せがないという事はよく知っていたが、「いつか正常な時代が来るであろう」事を信じて出版に踏み切ったのである。

一方 Cornwall における教育活動では以前よりもむしろいそがしい位であった。1923年以来、教育委員会の会長になっていた彼は、特に小、中学校の発展に努力し、1931年、その職を辞したが、その後、Fowey の Grammar School 校長となって教育活動に勉めた。

又、その頃の彼の講演、講義は、単に Cambridge 大学だけではなく、Oxford, Edinburgh の各大学を初めとして、あらゆる団体、協会、学校から講演を依頼されている。しかも彼は忠実に、精力的にそれの一つ一つ果して行った。その講演も、それぞれの場所に適した、内容のあるものであり、Cambridge の講義のようによく準備されて、美しい言葉で語られていた。

以前から会合や、大勢で夕食会をするのを非常に好んでいたQは、色々な招待に気軽に応じ、自分自身でもパーティをひらいて、その席上、彼独特の応揚な態度と、ユーモラスな話で出席者を楽しませたらしい。丁度その頃、ある宗教団体から某ホテルで行われる昼食会に招待されたQは、席上酒の出ない事を予想し、使いをホテルにやって給仕長にその事を確めさせた。すると、よく心得た給仕長は、「勿論禁酒ではあるが、先生は御心配いらない」という返事である。そこでQは安心して出席したわけ

だが、給仕のついでくれたレモネードを一口飲んでみると、実はジンを混ぜたものであった。多少色の違っている事に気づいた同席の一人が、Qに尋ねると、Qは平気な顔をして、「ええ、これは特別なレモネードです。あなたもどうぞ」と言って給仕に自分のと同じものをその人につがせた。その人は一口飲んでみて、「これはすばらしい」と言ったものだから、次々にQと同じレモネードを要求する人が多くなり、Qはその度に、給仕に、「同じもの」をつぐように命じて、遂に全体が、ジン入りのレモネードを飲んでしまいなごやかな昼食会になった、という事である。

Cambridge 大学内においても、自分の部屋が大きく改造されたのを機会に、様々な夕食会、昼食会をそこで催したものであった。彼はその部屋にじゅうたんを敷き、きれいな壁紙をはって、自分の好みに応じた装飾をほどこし、「わが食堂」と呼んでいた。Qは13という数には人並以上に迷信家であつたらしく、その事を知っていた会員達は、「わが食堂」の客が13人にならないよう特に気を配っていた。たまたま13人に招待状を出してしまったある幹事は、Qの気がつかないように、若い方の会員達を30分交替で部屋に入れる、と言う苦心をした事があった。

Qは Cambridge でも Fowey でも、名実共に、「有名人」であつた為、Foweyに帰る時、或いは Cambridge に戻る時の、駅の様子は一寸した「見もの」であつた。駅長以下、すべての駅員が喜んでQの指図に従い、列車はQが気に入ったコンパートメントに到着くまで発車しなかった。駅長、警備員につきそわれ、二人の赤帽と、Cambridge 大学からの見送りの人々を従えて、ゆっくりとした足取りでプラットフォームを歩んで行くQの姿は誠に印象的であつたという事である。

Qは1933年秋、70歳の誕生日を迎えた一時心配された眼の方もすっかりよくなり、自分では「全く老人になってしまいました」と言つてはいるものの、以前よりも健康状態はよく、精神的にもまだまだ青年のような新鮮さを失つてはいなかった。

70歳になったQは教育委員及びその他の公職から退いたが、それでもなお Fowey における色々な行事には活動していた。例えば George VI の戴冠式祭典では 1911 年の場合と同じく、自らすすんでプログラム編成にあたつたし、年中行事になった Fowey レガッタを運営したりして、生活を楽しみ、又、そのレガッタの後に行われたお祭りでは回転木馬に乗って笑い興じると言つたような茶目っ気も発揮していた。

1936年、Qが73歳の時、今までのすぐれた文学的、社会的活動に対して Bodmin 市は、Qを同市の Freeman に推挙し、翌年 Fowey もその例にならつて、Qを Fowey の Freeman にしたが、更に同年、市長に彼を選んだ。これは彼にうつつ



けの職であつたろうと思われる。すでに小説中の Fowey 市長は有名であり (Fowey をモデルにした小説 Troy Town に出てくる)、実際、Qは Fowey を愛し、Fowey の為<sup>に</sup>に多年にわたって尽くして来たからである。

Q自身にとってもこれは甚だ喜ばしい事であつた。市民もQの市長を大喜びで迎えた。そしてどんな所でもQにあえば挨拶をし、親しげに話しかけた。Qの方ではそれが誰であろうと、丁寧な口調で答え、決して尊大ぶった態度はとらなかった。(というより、そういう態度は出来ない人柄だった) 市民の呼び方も、“Sir,” あり, “Sir Arthur,” あり, “Q,” あり, “閣下”, あり, 様々であつたが, “陛下” と呼んでも決して不思議ではない位であつた。というのも Fowey は一つの王国であり、Qがその王である、という観があつたからである。

Qの在任中、Fowey 市政 25 年祭が行われたが、(Qも Fowey 市にするために多大の尽力をした) 彼は 25 年間の市の歴史を表わした色々<sup>だ</sup>な山車を作つて市民と共に祝つたものであつた。

1940年 9 月、第二次世界大戦が始つて、Cambridge の校舎の一部は終戦まで空軍の占める所となつたが、他の部分はそのまゝ大学の講義に使われた。そして政府の方針として、学生の軍務期間中も教育を続けるようにという指令があつたため、第一次大戦の頃のように、教室が、がらがらになってしまう事はなかつた。Qはあらゆる機会に、戦争といへども大学生活を失わないよう、学生達に諭していた。

1941年 1 月、彼は Cambridge に赴こうとして Fowey の家を出ようとした時、凍つた土の上でひどく転び、一週間程寝ていなくてはならなかつたが、程なくそれもなお、戦時中の交通不便にも拘らず、相変らず元気に Fowey, Cambridge 間を往復していた。

Qは第二次大戦における連合軍の勝利を始めから確信していた。1940年 5 月から 6 月にかけて、歐洲の英仏軍が大損害を蒙り、ダンケルクから撤退した、例の、“Military Disaster” の時も、決して動揺を見せなかつた。又空襲がはげしくなつた時、最初は学内の防空壕に退避して、その中でクロス・ワード・パズルをやったり、仲間の教授達と話などをしてゐたが、やがて彼は警報が鳴つても悠々と眠り続けるようになった。Cambridge 市に爆撃があつた時も、彼はぐっすりと眠つてゐた、という事である。

1943年秋、Qは 80 歳の誕生日を迎えたが、なおかくしゃくとして相変らず Cambridge に出講した。頭もはっきりとして老人ぼけする事もなく、多少背は曲つてゐた

けれども以前と同じくすらりとした長身を保っていた。白髪はふさふさとしており、顔にはほんどしわさえなく、若者のようなみずみずしい血色をしていた。

彼の Cambridge における日課は今まで通りきちんと実行された。——朝起きて微温湯浴をすまずと、例によってゆっくり服装を整える。実際に整えるのであって、例えば、午前中に講義のある時は必ずモーニングを着用した（これは最初の講義の時からそうであった）。講義のない時は実に派手な色のツウィードの背広か、明るい茶色の上衣に狩猟用のズボンという恰好で胸ポケットには上衣にマッチした色の絹のハンカチをさしこみ、堅いダブルカラーに、白い水玉模様のある青か茶の蝶ネクタイを結んだ。

朝食後、Fowey の家族に手紙を書く。前にも述べたが、五十四年間の結婚生活で、家を離れている時は手紙を書かない日はなかった。それから昼食まで、自分の仕事をする。午後に会合とか招待がない場合は、昼食前に乗馬ズボンか、夏であったらヨット用のズボンと海軍士官の着のような青色の上衣に着がえる事がしばしばあった。昼食会がない場合は、学内のホールで他の教授達と一緒に昼食をとり、その後、誰彼となく自分の部屋に招いて、酒や煙草をすすめたものだった。客が帰ってしまうと煖炉のそばで（彼の部屋には年中火が入れてあった）、籐椅子にもたれ乍らしばらく読書したり、昼寝をしたり、又気がむけば、校庭へ足に向けてそこで行われている試合を見、或いは大学のボートハウスへ行って漕艇練習を眺めたりしてお茶の時間まで過した。それから夕食までの間は再び読書か著作に費し、七時少し前になると、黒の上下に服装をあらためて七時半に夕食をホールでとる。（これでもわかるように彼は服装に関してはいわゆる正当派イギリス流を堅持しており、夕食の時に他の人々が〔特に若い世代の者達が〕正装しなくなっていくのをなげかわしく思っていたそうである）夕食後は、仲間と一緒に談笑したり、自分の部屋に招いて、旧友の事、例えば Charles Cannan とか、Thomas Hardy とか J.M. Barrie とかいう人々の思い出話や、ボート、庭づくり、或いは Fowey の事について話をするのを好んだ。客が帰ってしまった後、寝るまでの時間は再び仕事に費やされる。

さて寝に就く時であるが、Qには誠に子供のような、——或いはユーモラスと言うか——そういう所があって、自分がパジャマに着がえてベッドに入るまで、誰かが傍にいてくれる事が好きだった。着がえる最中もずっと喋りつづけ、ぬいだ服を丁寧にたたんで寝室に持って行く。パジャマ姿で再び部屋に戻ってくると、煖炉の側に腰を下ろし、寝る前の一服を楽しむ。ひきとめられた客は、それでやっと放免されるわけであるが、一方Qはベッドに入ると、ほんの二、三分でぐっすり寝入ってしまうので

あった。

1944年の春学期の初めまではこういう毎日が続いたが、その年の冬は非常に寒く、不順で、さすがのQもこれを乗り越えるだけの体力はなかった。食慾はすすまなくなり、好きなパイプを口にする事も出来ないようであった。3月1日、Cambridgeを離れて Fowey に帰ったQは、手当てをうけて、一時健康を取り戻し、色々な会合に出席出来るようにまでなった。3月23日、いつもの通り朝の散歩をしている時、車をよけようとした際、路傍の石につまずいて転び、顔にけがをした。幸い大した傷にはならず、これが彼の健康を損ったというわけではないだろうが、4月に入ると、急速に衰えを見せ、遂に起き上る事が出来なくなってしまった。生来の楽天主であった彼は病氣中でも家人に書き取らせた手紙を Cambridge 大学におくり、6月には出講したいという希望をもらしている。しかしその希望も空しく、5月12日、容態は急変し、不帰の客となった。

葬儀にはあらゆる階級の人々が列席し誰彼の差別なく面倒を見、その人達のために働きつづけて来た故人の人柄をしのばせた。

Qは、Fowey の町の後手にある、生前彼が好んで散策していた岡の墓地に埋葬されている。

かくして多彩な81年の生涯は閉じられた。小説家、詩人、学者、批評家、運動家、教授、Knight 爵、Fowey 市長、ダンディー、ユーモリスト、話し好き、愛酒家、愛煙家、祭り好き、交際家、誠実な友人、愛妻家、フェミニスト——Qという人はこういう人間性の善をたくさん合せ持っていた、典型的な英国紳士であったと言える。

Part I 終り。 次回は「作品について」